

顎下腺癌

顎下腺癌に対する治療方針を表1に示す。手術治療を第一選択とした。手術方針はステージと悪性度によった。高悪性では顎下腺を含む全頸部郭清とし、低/中悪性では顎下腺を含む選択的頸部郭清（I～III）とした。化学療法は基本的に施行なかったが、再発例や手術不能に対して施行した症例もあった。高悪性、N+、腺様嚢胞癌では術後照射を施行した。

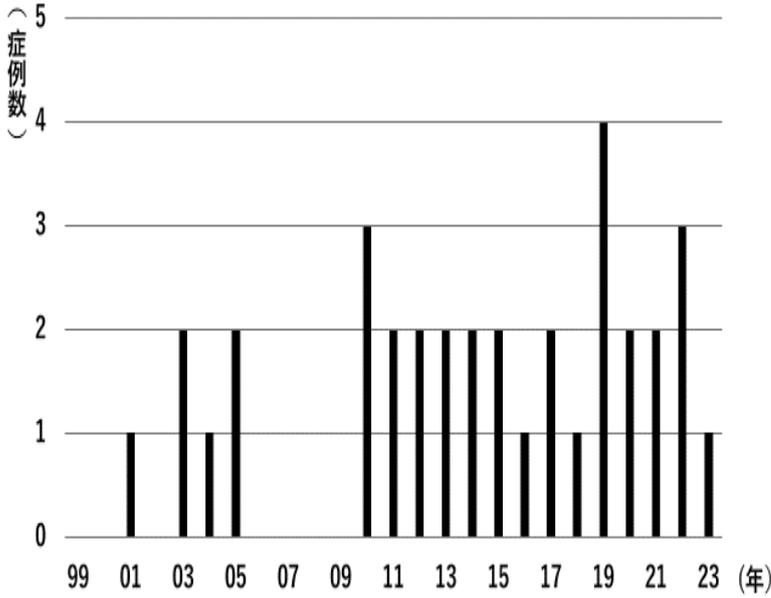


図1：顎下腺癌の年度別症例数

1999年9月～2023年8月までの手術症例数。2010年以降では年間1～4例の治療を施行した。

ステージと悪性度により決定する

- ・手術
 - 高悪性・・・全頸部郭清、下顎縁枝切除
 - 低/中悪性・・・選択的頸部郭清（下顎縁枝温存）
- ・術後照射
 - 高悪性、N+、腺様嚢胞癌

表1：顎下腺癌の治療方針

顎下腺癌35例の病理組織型

	低/中悪性	高悪性	計
腺様嚢胞癌	7	4	11
唾液腺導管癌	0	11	11
粘表皮癌	2	1	3
多形腺腫由来癌	3	1	4
腺癌NOS	1	1	2
腺房細胞癌	1	0	1
その他	1	2	3
計	15	20	35

表2：顎下腺癌の病理組織型

病理組織型では腺様嚢胞癌と唾液腺導管癌が最も多く、ついで多形腺腫由来癌、粘表皮癌の順であった。悪性度別では低/中悪性が15例、高悪性が20例であった。

T \ N	N0	N1	N2a	N2b	N2c	N3	計
T1	5	0	0	0	0	0	5
T2	13	1	0	3	0	0	17
T3	2	1	0	3	0	1	7
T4	1	1	0	2	2	0	6
計	21	3	0	8	2	1	35

表3：顎下腺癌のTN分類別症例数

顎下腺癌35例中、T1が5例、T2が17例、T3が7例、T4が6例であった。N+症例は14例（40.0%）であった。

Stage	悪性度		計
	低/中	高	
I	2	3	5
II	9	3	12
III	1	2	3
IV	3	12	15
計	15	20	35

表 4：顎下腺癌のステージと悪性度の関係

ステージが上がるほど悪性度も高い傾向があったが、ステージ IV の低/中悪性が 3 例、ステージ I の高悪性が 3 例に認められた。

T	N						計
	N0	N1	N2a	N2b	N2c	N3	
T1	3	0	0	0	0	0	3
T2	8	1	0	0	0	0	9
T3	0	0	0	0	0	0	0
T4	1	1	0	1	0	0	3
計	12	2	0	1	0	0	15

表 5：顎下腺癌 低/中悪性の TN 分類別症例数

顎下腺癌 低/中悪性 15 例中、T1 が 3 例、T2 が 9 例、T3 が 0 例、T4 が 3 例であった。N+症例は 3 例 (20.0%) であった。

T	N						計
	N0	N1	N2a	N2b	N2c	N3	
T1	2	0	0	0	0	0	2
T2	5	0	0	3	0	0	8
T3	2	1	0	3	0	1	7
T4	0	0	0	1	2	0	3
計	9	1	0	7	2	1	20

表 6：顎下腺癌 高悪性の TN 分類別症例数

顎下腺癌 高悪性 20 例中、T1 が 2 例、T2 が 8 例、T3 が 7 例、T4 が 3 例であった。N+症例は 11 例 (55.0%) であった。

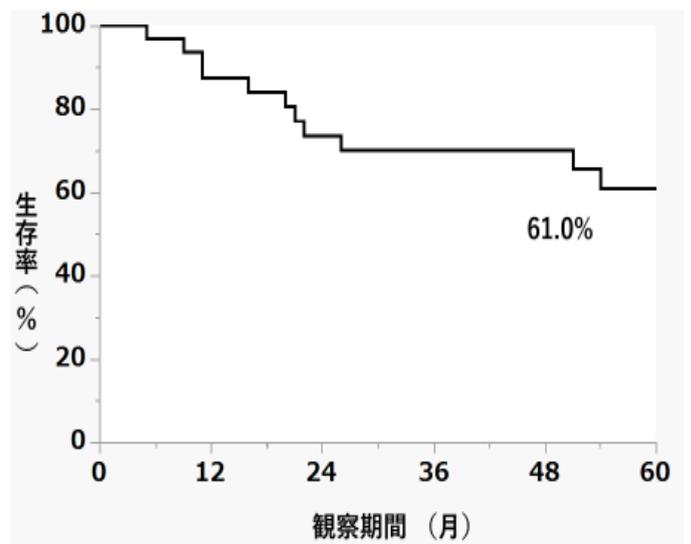


図 2：顎下腺癌の疾患特異的生存率—全症例 (35 例)

全症例の疾患特異的 5 年生存率は 61.0% であった。

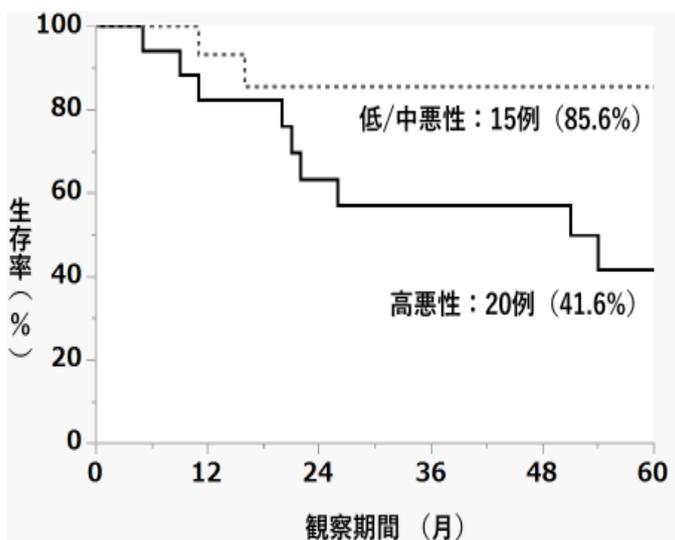


図 3：顎下腺癌の疾患特異的生存率—悪性度別 (35 例)

低/中悪性度および高悪性の疾患特異的 5 年生存率はそれぞれ 85.6%、41.6% であった。

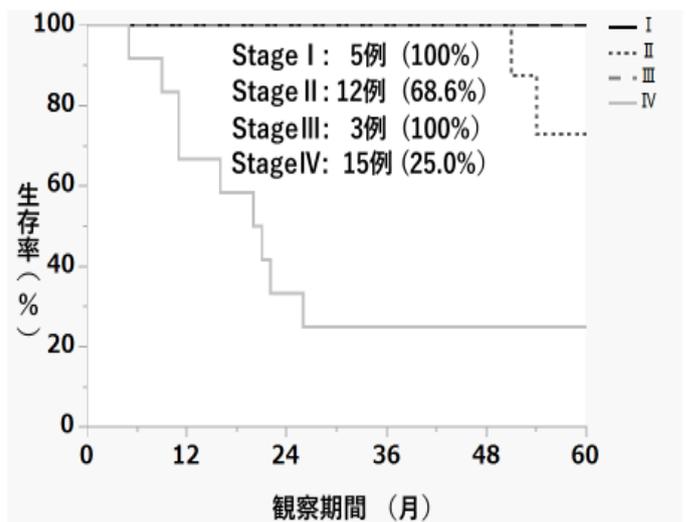


図 4：顎下腺癌の疾患特異的生存率—ステージ分類別 (35 例)

ステージ別の疾患特異的 5 年生存率はステージ I から IV でそれぞれ 100%、68.6%、100%、25.0% であった。

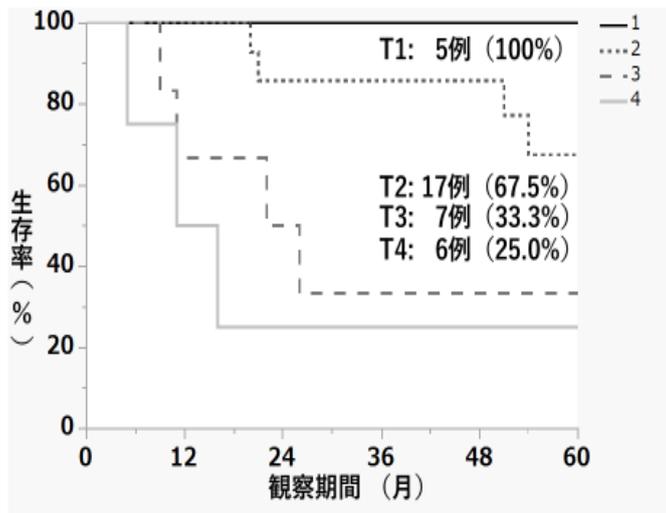


図5：顎下腺癌の疾患特異的生存率—T分類別（35例）
 T分類別の疾患特異的5年生存率はT1からT4でそれぞれ100%、67.5%、33.3%、25.0%であった。

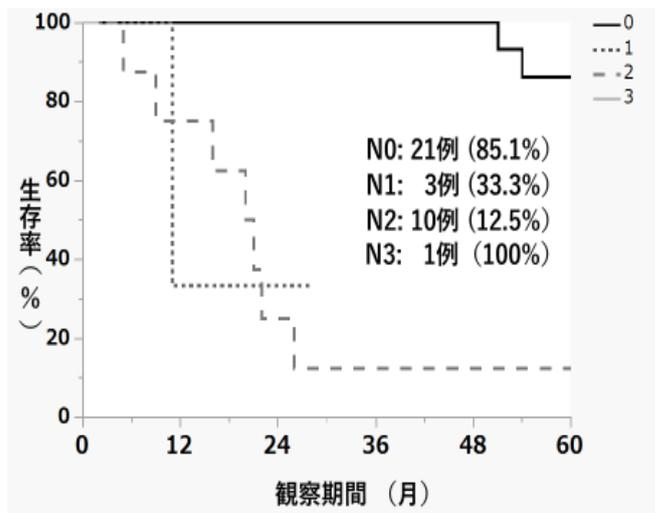


図6：顎下腺癌の疾患特異的生存率—N分類別（35例）
 N分類別の疾患特異的5年生存率はN0からN3でそれぞれ85.1%、33.3%、12.5%、100%であった。